
黄昏ミルクティー

武田美空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏ミルクティー

【Nコード】

N2648C

【作者名】

武田美空

【あらすじ】

無気力な毎日、ただ虚しく過ぎる時間。そんなある日、ふらりと立ち寄った公園で一目惚れをした翔太。温かく優しい時間の流れる場所で、徐々に相手に惹かれてゆく。年上の女性に恋する高校生男子の、淡くて切ない物語。

お幸せに、とはどうしても口に出すことが出来なかった。

そうしてしまえば、わずかな後悔とともに、幾らかの満足と充実が得られることは分かっている。

しかし、どうしてもそれだけは言えなかった。今日の今日まで、奈津子に逢ってしまえば、自分がどれほどに未だ未練を抱いているのか。その醜さを突きつけられてしまう気がして。どんなに金を積まれようとも、祝福の言葉だけは翔太の口を突いて出ることはなかった。

ほづら、見てごらん。

誰かにそう誘われたように、多くの笑顔に囲まれた男女を見やる。なんと「幸せ」そうなことが。自分と一緒にでは得られなかったものを。今、大勢の人間に未来を祝福され、笑って受け止めている。奈津子。

翔太にとって、今でも愛しい、ただひとりのひと。

*

初めて出逢った、あの日。

まだ桜が散り始めてすぐ。翔太が進級して一ヶ月ほど経過した頃である。その日は火曜日、掃除当番だった。クラブに所属して

いない彼の帰宅時間がわずかに遅れたのは、その理由からである。

押し付けられたモップを払うことは出来なかった。それを手で押しやることは、何だかとてもない「悪」のようで、特に悪ぶってもいけない、ごく普通の男子生徒である彼は、ていよくかわす術を持たなかった。

大体、ふと思うことがある。

自分の存在意義とは何か、と。そう考える時点ですでに理由などないのだが、改めて頭をひねってみても、ちっとも浮かんでこない。それが不安だった。

掃除をしようにも、班員が集まらず、結局、隣の席の読書好きな女子生徒のたつたそれだけで、教室を掃除した。お互い沈黙を守ったまま、黙々と机を移動させ、さすがに面倒くさいのでモップで適当に走り回り、ごみも貯まっではいたがやはり面倒くさいので、そのままにしておいた。

ちりとりでごみを集めている数十秒間、『何をやっているんだ』と自分を責めることを忘れなかった。いや、責めるといふよりかは失望にも近い、呆れるにも近い、そう、ただ 自嘲するしかなかった。

春が終わる。

翔太の学校は田んぼに囲まれており、その間を農道が自由に伸びている。土地が狭いため二階建て住居が多数見られ、通学路なのか小学生が至る所でランドセルを揺らしている。その赤とか黒とかピンクとかを窓から眺めていると、いつのまにか一日が終わっている。見つめていたはずのランドセルは、いつの間にやら消えていた。道を行くは自転車を引く老人ばかりである。

そんな毎日が続く。すでに入学して一年が経過していた。

比較的性格は明るい方ではあると思っっている。あえてそう言うのは、ただ「思っっている」だけであるからに他ならない。他人からはどう見えているのか、それが分からないので「明るい方である」と自信なさげに肯定するしかないのである。

友達もいる。教師からの評判もさほど悪くはないはずだ。

が、そんな自分が日々、何を残しているかと考えると、結局は『存在意義』について自問自答、その繰り返しになってしまう。それもまた無駄な時間となるのだ。

何のために季節は過ぎてゆくのだろう。こうして散ってどこかに消えてゆく花弁も、春を思わせるだけで結局、翔太に何かを残すこととはしなかった。

何のために、誰のために 成績も平凡、クラブは無所属、スポーツも人並、そんな自分が何をやりたくて、こうしてまた春を終えるのか。それが分からない。答えが出ないのである。誰に聞こうとも、鼻であしらわれて終わるに違いない。

そうやって、掃除を終えた瞬間、どっと溜め息が喉からついて出たのは言うまでもない。女子生徒はとっくに図書室に向かっていた。

机を整え、自分の席に座る。帰らなくてはならない。特に何をしようというわけではない。ただ、街をひとりふらつく度胸がないだけだ。仕方なく、学校を終えると真っ先に帰宅して夕飯を口にする。この十六年間、ずっとそうだった。

頬杖をついて窓ごしに夕焼けと睨みあう。夕陽は逃げない。わずかに沈みながらも、翔太が勝負を投げ出すまでは、ずうっとそこにいて、街に滲んでいく。

こうしているのが好きだった。

孤独を余計に味わうだけだったけれども。

*

教室に誰も居なくなつたのを見計らい、足早に学校を出た。

いつもは一刻も早く自室のベッドに身を投げたいものだが、なぜかこの日だけは違った。おそらく、知っているからだろう。自室にこもって思案にふけっただけでも、結局現実から逃れることが出来るのは、夢い夢の中だけだということ。

だからなのか、少しだけ遠回りをしてみたくなった。

学校を囲む農道を抜け、住宅街に出る。広い道路が一本だけ見える。その脇には小学校が構えているが、翔太が通学路に利用しているのは、その一本道。突っ切れば十分ほどであっという間に自宅が見えてくる。それもまた単調な帰り道であった。

が、その十分たらずの時間がひどく勿体無く思えた。

その十分間を、自分はどうかやって無駄にしてきたのだろうか。それすら覚えてはいない。とっくに並木道の桜も散ってしまった。

確か、公園があつたはず。

小学校脇の一本道を避け、あえて小道に出た。小道とも言えないだろう。舗装もされておらず、そこはただの砂利道だった。大小さまじまな顔をした石ころが、自転車の邪魔をする。しかし、何故かタイヤを通して感じる、そのでこぼことした感触。それは翔太にとってとてつもない衝撃にすら思えた。

自分がどれだけ、万物と接していないのかを、改めて思い知る。砂利道を通ることすら面倒だと思ふようになり、転んだら危ないという警戒心のみで一本道を突き進んできた昨日までの自分は、なんと間抜けなことだろう。タイヤを滑らせて転倒する失態よりも、ずっと情けない。

砂利道と悪戦苦闘しながらも別れを告げ、小学校が後方へと徐々に離れて行く。そうして数十メートル足の回転を速めると、住宅の生垣で死角になっていた場所に存在するものが見えてくる。

小さな、児童公園。

何てことのない、ただの公園。とは言っても、ただの広場といふべきか。存在する遊具はブランコに、劣化したすべり台。それに木造ベンチが二つ並んでいる（遊具とは呼べないが）。そして、芝生

がその面積の大半を占めていた。

どうしてこんな寂しい空間に足を運ぼうなどと考えたのだろうか。考えれば考えるほど、余計に分からなくなる。きつと理由などないのかもしれない。ただ、気の向くまま、風の吹くまま、雲の流れるまま。自転車をこぐ脚も、止まることを知らなかった。そう、直感としか言いようがないのである。

時間も五時を回っているからなのか、子供の姿があまり見られない。キャッチボールをする小学生、母親とベンチに腰掛けぼんやり春の空気を満喫している女の子。そのくらいなものだ。ゆったりと平穏な時間が、そこに流れている。まるで切り取られたように、そこだけ自由気ままに、時間の制約など受けていないようである。

せっかくだ、少し休んでいこう。

道路脇の自販機でミルクティーを買う。春とはいえ、夕方は肌寒い。温かいその缶を手のひらで包み込み、身を縮ませる。そのまま、そそくさとベンチに走る。おそらく手作りなのだろう、不細工に切断されただけの木材を、釘で打ちつけ、脚を付けただけ。いかにも、そんな感じだった。

ふと足を止める。

先約がいた。先ほど、入り口から見かけた時はそこに存在していなかったはずの女性。猫も一緒だ。その猫は全身真っ黒で、眼は夕陽を反射してそこだけ輝いている。黒い塊を膝に抱き、その背を静かに撫でているひと。若い。まだ二十代だろう。

肩までの茶色がかかった髪の毛が、春風に揺れている。それもまた夕陽に煌いて、翔太は眼を細める。穏やかに、夕焼けに滲むようなその姿は、壊れてしまいそうなほど、儂い。時間を緩やかに感じさせていたはずの子供たちの喧騒も、いつの間にもやら静まっている。公園には翔太と女性、それに一匹だけとなった。

泣いている。

近づかなくとも分かった。うとうとと瞳を閉じた猫の額に、ぼつりと光るものが見えたのだ。涙だ。勿論猫ではない。その女

性のものだろう。

この瞬間、確かに感じた。今度は、自分たちが切り取られた写真のように、時間が過ぎることのない空間に存在してしまった。そんな風に。

時が止まった。そう思った。

声をかけることなど出来るはずもない。他人だからとか、泣き顔など他人に見られたくないだろうから。などの、デリカシーからでもない。ただ、触れては壊れてしまうから。泡のように、ちっぽけに消えてしまいそうだから。その堪えるように瞳を伏せている彼女の、その肩に。手を置くことなど出来なかった。

だから。翔太は一步を踏み出して、手のひらで熱を発している缶を差し出した。彼女が顔を上げてもないのに。こちらの存在に気づいてもいないのに、押し付けるようにミルクティーを眼前に突きつけた。

地面を踏みしめる音に気づいたのだろう、ふと彼女が顔を上向ける。その瞳の端には涙の筋が頬を伝っていた。長い睫毛が雫をはらんで震えている。瞬きするたびに、粒は猫の額に落ちてゆく。その光景はとても美しかった。

女性の腰の隣に缶を叩きつけるように置くと、一目散に走り出す。自転車に鍵をかけていなくて良かった。もたつくことなく、翔太の姿は住宅街へと消えてゆく。

それから彼女がミルクティーを手に取り頬を緩ませたことを、その時の翔太は知らない。

奈津子との出逢いは、そう、春には少し熱すぎたミルクティー。

火傷しそうなほど強い感銘を受けた、夕暮のベンチでのこと。

あれから何かが変化しそうな気配もなく、翔太は『相変わらず』
な日々を過ごしていた。同じ時間に起床し、玄関を出て、変わらぬ
通学路を自転車で駆け抜け、学校に着くと特に愛着もない校舎を見
上げ、一日の始まりを憂える。

ただ、心情の変化、というものを感じていた。

明らかに、翔太の心持ちというものが前向きになったのだ。霞が
かっていた視界が徐々に澄んでいくのを日に日に感じる。冬場に曇
った窓ガラスに指で触れると、向こうの景色がクリアに見えるよう
になる。何だかよく分からないがそんな感じなのだ。

それは、帰宅時間が毎日三分ほど遅れるようになったことからも
自覚していた。これまで翔太は特に寄り道もせず、ロボットのよう
にほぼ正確に帰宅していた。ワイドショーを見ながら寝転ぶ母親の
姿にため息をつき、ブラウン管の画面に映る時刻を確認していたの
だから。

しかし、あの日から、何故か心の奥がざわついて仕方ないのだ。
遠足の前夜、入試の当日、ドキドキともワクワクともハラハラとも
言えないあの不安と期待の入り混じった感情。波立つ気持ちに理由
が見付からないのに、自転車は勝手に翔太を未知の世界へ連れ出し
て行く。

公園に道草をするのが日課になっていた。常連である子供たちの
顔を覚えるまでになった。五月も半ばになり、色づく緑が少年少女
の笑顔に映えて鮮やかだ。自分も昔はあややって膝や袖を泥だらけ
にして走り回っていたのだと思うと、ふいに虚しくなる。いつから
指先さえもがわずかな土に汚れるのを嫌悪するようになったのだろ

う。はしやぎ回って陽が暮れる、純粹無垢な時間の潰し方を馬鹿馬鹿しく思うようになってしまったのだろう。

学校の校舎なんかよりも親しみを感じてしまうベンチに腰掛ける喉を潤したいが、自販機の飲み物の味は全て舌に味わわせてしまった。毎日毎日、百円弱の出費は痛い、部屋にこもり切りで陰鬱な時を過ごす方が、よっぽど精神的に苦痛なことに気が付いたのだ。

気づけば、人差し指はホットミルクティーのボタンを押していた。この季節にまだホットがあるのは珍しい気もしたが、あの身体を癒すような温かみと甘さが翔太を惹きつけた。

飲み終わったら、帰ろう。

いつもそう決めて三分だけ、その場所から動かないことにしている。本当は気付いていたのかもしれない。あの日から、自分の頭が妙に晴れやかな理由だけではない。こうして自分の生き方を見つめ直す場所が、公園である理由だ。緑に包まれて開放感があるせいだろうか。本当に？ 情けないことに、自分で答えを出すことが出来ない。逃げてばかりだ。

ふと気配を感じて、顔を上げる。

あの女性だった。

思わず目を見張る。心の準備も何もなく、ぼけっと缶に口をつけている所へ、まさか予想だにしないゲストが現れるとは。染色しているにも関わらず傷みを感じさせないつややかな髪の毛、かき上げながら彼女は微笑んだ。

「こんにちは」

特に特徴があるわけではない声質なのに、不思議とイメージ通りのなを感じた。慌ててミルクティーの缶から手を離し、自分も立ち上がる。女性にしては高めの身長で、それほど翔太とは視線が変わらない。

こんにちは、と蚊の鳴くような声で翔太が応えると、女性はまず

頭を下げた。何故、頭を下げられなければならないのかと困惑するものの、言葉が出ない。極度の緊張が、翔太の全身を支配していた。「この前、ありがとう」

当たり前のようにそう告げる彼女に、ますます戸惑う。人違いではないのか、お礼を言われるような行為をしたのだろうか。しかし、心の底では何故だか飛び上がるほど嬉しさを噛み締めている自分がある。会えた。また、偶然とは言え顔を見ることが出来た。

彼女は続ける。

「ミルクティー、美味しかった」

その一言で、何かがずんと胸にのしかかる思いがした。覚えていてくれた。自分が突発的に行った、迷惑とも言える行動に丁寧すぎる礼をしてくれた。どうやら、人違いでもなさそうだ。

「あれから、よくここに来ていますよね」

どう見ても年上の相手に敬語を使われるのは、どこかくすぐったかった。

「はい、まあ……」

うるたえないように精一杯落ち着いて口にした言葉は、情けないほど震えていて、緊張が丸分かりだった。

「機会を見て、もっと早くお礼、言おうと思ったんだけど……遅くなってごめんな」

「さい」

そう言っって苦そうな表情で、また深々と頭を下げる。

「今日、会えて良かった」

本当にありがとう、と言って最後に彼女は微笑んだ。

その瞬間、不思議な思いに駆られる。全ての景色が、この女性を引き立てる道具にしか見えなくなったのだ。夕陽に支配されてゆく空の色、家路に着く親子の姿、露をはらんだ草花に、家族団らんを楽しむに過ぎず住宅の灯りも、そのことごとくが彼女の前には霞んで見えた。

「何か、お礼させてもらえない？」

「……いや、こっちが勝手にしたことつすから」それは本心だった。自分勝手に缶を押し付けて、自分勝手に逃げ出しただけで、そこにお礼を言われる筋合いなど無いのだ。ましてや、お返しをしてもらうほど、図々しい人間

でも無ければ、またそこに筋合いなど無い。

「お願いします。あの時、あのミルクティーですいぶん救われたから、

お願い」

両手を合わせて力強く言い放つ。その瞳には断ることなど許さな
いという意味が見えた。だからといって、あの一缶で彼女の何を救
えたのだろう。確かに泣いてはいたが、あんな飲み物ひとつでこの
ひとの苦しみを取り除けたとは思えない。

しかし、ここで断ってそのまま帰宅すれば、それで終わってしま
うような気がしたのだ。変わらぬ日常に戻って、ひとの頼みすら無
視した自分に、さらに嫌気が差してしまうに違いない。

だから、翔太はうなずいた。

「……じゃあ、遠慮なく」

すると彼女はほっとしたように、「良かった」と安堵した表情を
見せた。やはり笑顔の方が似合う。出逢ったばかりの人間に対し
て、自分は何を考えているのだろうと、やましい心を振り払うかの
ように、彼女の話に耳を傾ける。

「何がいいかな？　って言っても、大したお礼出来ないけど、
ね」

見た感じでは大学生あたりだろう。懐が寂しいのはお互い同じな
のだ、それにもとより高額な品物を要求する気はなかった。しかし、
初対面とも言える相手に品物でなく【行為】を求めるのは気が引け
る。肩をもめ、とかそんなこと言えるわけがない。

「……じゃあ、あそこの自販機でおごってもらえれば、それで」

翔太の指差す先を見やり、そんなもので大丈夫なのかと心配そんな顔をする。思わず笑ってしまふ。自分と違い、感情に素直で、表情がころころ変わるのだ。

「そんなに遠慮する必要、無いんだけど？」

「…ミルクティーひとつに、それ以上のものを求めるのはおかしいと思うけど」

まだ納得の行かない彼女に、「充分つすから」と答える。最後に、本当にそれでいいのかと目で訴えかける彼女に、翔太はしっかりとうなずく。

「そう、分かった。じゃあ、何が良い？ 一本と言わず、何本でも良いよ」

とことん義理堅い人間なのだと思う。見知らぬ学生に、お礼だからとそこまで太っ腹になれる彼女の人柄が、じんわりと心を暖める。

「ミルクティーを、ひとつ」

自然に、その言葉が出ていた。

それまで口にしていた缶のラベルを覗き込まれ、「甘党なのね」と不思議な顔をされる。

「そんなにミルクティー、好きなの？」

連れ立って公園脇の自動販売機に向かう。呆れているのか喜んでいいのか分からない表情に鼓動が高鳴りながら、「まあ……」と曖昧に答えた。

軽く流されるかと思っていると、予想もしていなかったほどの笑顔で、女性は口にする。

「気が合うね」

これからの人生、ミルクティーだけで過ごしても構わない 翔太はこの時、本気でそう思った。

熱すぎるミルクティーの缶。

いつもよりさらに温度が高く感じられたのは、隣で微笑む出逢ったばかりのひと 彼女のせいなのだろうか。

胸にぽつりと浮かんだ想いに名前が付けられないまま
とつての真実は、火傷をした唇の痛みだけだった。

翔太に

「なんだか最近、明るくなったな」

そう言ったのは、中学時代からの友人である真鍋だった。

「いや、おまえはもともと明るいけどさ」

彼の言わんとすることがなんとなく分かるような気がした。自分でも、胸が躍るように毎日気持ちが高ぶっているのが感じられる。自然に笑顔でいられるようになってきた。

これまでは自分の存在について延々と問答を繰り返してきた。答えに行き着くこともなく。学校では、おどけて笑いを取るピエロのような役割を演じてきた。どこでも本当の自分を出すことが出来ない、そんな気がしていた。

しかし、ここ最近、少しずつ結び目がほどけてゆくように、頬がふわりと緩むのだ。窓の向こうで揺れる木々の枝、足元で懸命に生きる草花、怒ったり泣いたり、笑ったり　クラスメイトの様々な表情にまで、『よろこび』を感じるようになった。見えるものすべてが面白い。

きつと真鍋もそれを感じ取ったのだろう。おそらく、真鍋だけではないかもしれない。自分はそれだけ、周りを見ることをしていないかったのだ。

「今日は部活が休みでさ。どっか行かないか」

真鍋は携帯電話をポケットにしまいながら尋ねた。

「どうせ暇だろう」翔太はうなずく。

「よし、決まり」

雑誌に載っていた古着屋に行きたいから付き合え、という真鍋の言葉を聞いているうちに、ふと思い当たる。

奈津子さん、また来るかな。

話は、彼女との再会の日までさかのぼる。

ミルクティーを飲み終わり、翔太が一息ついていると、相手が口を開いた。

「君はいくつ？」

年上の女性が放つコロンの香りに戸惑いつつ、答える。

「今年、十七です。高校二年」

「じゃあ、今は十六歳なの」

「ええ、まあ」

若いねえ、と呟く彼女に、「あなただつてまだまだ若いのに」

そんな気の利いた台詞のひとつも口に出来ぬ自分が情けない。そんな思いをごまかすように、今度は翔太が年齢を聞いてみた。

「女性に年齢を聞くのは失礼だ、って学校で習わなかった？」

少し目の色が変わったので、慌てて頭を下げると、「冗談だよ」と笑われた。笑うと目元が細くなり、雰囲気はさらに柔らかくなる。瞳に吸い込まれそうになるのをこらえた。

「二十三歳」彼女が小さく漏らす。今年で二十四歳だけど、と付け加えた。

七つも年上なのか。

淡い気持ち崩れていくような思いがした。相手はとっくに社会

に出ていて、自分はまだまだ親の力で学校に通う身だ。その差はひどく大きい。

ふと思う。自分は何を期待していたのだろう。

そして考える。なぜ、七歳も歳の差があることに落ち込んでいるのだろう。

答えに行き着くまでに、もう少し時間がかかりそうだった。

「ところで、名前は？」

名前よりも先に年齢を聞いてしまったのが何だかおかしくて、笑みをこぼす。そういえば、まだお互い名乗っていなかったことを思い出した。

「翔太 川崎、翔太」

「へえ、翔太くん」

瞬間、毛穴から湯気が噴き出るかと思った。今まで、女性に名前を呼ばれたことはあつたというのに、心臓がここまで飛び跳ねた経験はなかった。手のひらに汗をかいている。ぬるぬるとして気持ち悪い。

「 あなたは？」

「何か書くもの持ってるかな」

下校途中だったので、鞆があることにほっとする。教科書はすべて学校に置いてあるが、何かノートの切れ端くらいはあるはずだ。慌てながら中を探る。

「教科書、学校の机の中に全部置きっぱなしなんでしょ」

見透かしたように彼女に言われ、曖昧に笑ってみせた。数学のノートを見つけ、白紙のページを切り取る。ボールペンの芯を出して彼女に渡した。

「ありがとう」

さらさらと何かを書き進めてゆく。やがて顔をあげ、翔太に向かって切り取られた紙片を差し出した。

「それが私の名前」

そう微笑まれ、手渡された紙に目をやると、『小野田奈津子』の六文字が並んでいた。少し右上がりな字体だった。

「おのだ、なつこ……」

「そう、小野田奈津子。漢字六文字なんて、面倒くさいのよね」
投げやりに空を仰ぐ。「でも気に入ってるのよ、この名前」

「いい名前、ですね」

緊張のためか、せつかくの台詞も上手く声にならない。「ありがとう」と奈津子が微笑んでくれた瞬間、また血液が沸騰するかと思った。

夕方の少し冷えた風がふたりの頬を撫でる。奈津子の髪の毛が揺れて、その細さに目を奪われた。

と、同時に、わずかな疑問が頭をよぎる。

「あの、もうお礼はしてもらったし」

そうなのだ。ミルクティーを購入してもらった時点で、彼女はもう帰宅するなり、出かけるなり、何にせよ、この場所から去っていてもいいのだ。自分とこうして、世間話をする必要などないのだから。それなのに、風が冷たくなるような時間まで、なぜ。

「ああ、気にしないで」

翔太の考えていることを察したのか、奈津子は首を振る。

「この時間、いつもこの公園に散歩にくるから」

自宅から十分程度のんびりと歩き、夕暮れの温かい雰囲気の中、この公園でしばし時間を潰すのが趣味なのだという。初めて会ったときに膝の上で寝ていた猫は、お互い顔見知りの常連だそうだ。特にペットということではないらしい。

「だから、いつもケイ　あの猫とふたりだったから、今日は新鮮で楽しいんだ。この時間帯だね、子供もお年寄りも、みんな家へ帰るから」

そういつものものだろうか。

「ところで、君はよくここに来るの？　今まで見かけたことないよね」

あなたに会えるかもしれないと思ったから　なんて、口が裂けても言えない。翔太はまごつきながら、口を開いた。

「この公園に来ると」
徐々に夕陽が沈んでゆく。オレンジは薄紫を含んで夜を迎えようとしている。

「なんだか、不思議な気持ちになるから」
それは本心だった。確かに、奈津子の姿を探して公園に通っていた。しかし、ここに足を踏み入れると、自分の殻が少しずつひび割れていくのを感じるのだ。温かい黄昏時の空気が、柔らかく包んでくれる。そして、内側の自分を徐々に解き放ってくれるような。

「……分かるなあ。うん、とてもよく分かる」

意味不明な発言で、相手に理解してもらえないか不安だったが、奈津子のその一言でほっとした。流されるままの言葉ではなく、本当にそう思ってくれている　奈津子はそんなふうに頷いていた。

「　ねえ。今日はもう遅いから、またここでお話できないかな」
ベンチから、すっと立ち上がったかと思うと、奈津子はそんなことを言った。「私、一週間に三日はここでぼんやりしているから」

「　曜日とかは……」

「未定なの。いつも気まぐれに、思い立ったときに来るんだ。だから、君と波長が合えば、また会えると思う」

手のひらはびっしりと濡れていた。極度の緊張で、がくがくと頷くことしか出来ない。喉がからからに渴いていて、言葉が搾り出せないのだ。

「　良かった、じゃあ、また」

白くて小さな手のひらを振りながら、目元をすっと細め微笑む。その笑顔は、夕陽の鋭い光に紛れて残念ながらよく見えなかった。手をかざして光を遮り奈津子のいた方向に目をやると、そこには、もう誰の姿も見えなかった。小さな公園の中には、呆然と立ち尽くす自分だけ　。はじめから何も存在しなかったかのように。

夢だったのだろうか。ついさっきまで隣り合って言葉を交わ

していた女性は　奈津子は、自分が作り出した幻想だったのだろ
うか。

ふと気付く。

左手には、ノートの切れ端が握られていた。

そこには、右上がりな字体で『小野田奈津子』と書かれていた。

「悪い、おれ、用事がある」

真鍋は「暇なんじゃなかったのか」と不満そうな顔をした。翔太
はお守り代わりにポケットに入っているノートの切れ端にそつと触
れて呟く。

「　　待っていないくちや、いけないんだ」

今日は来るかもしれない　毎日、そう考えて過ごしている。

夕暮れ時の公園は、草花が光を反射してきらきら輝くのだ。その
中を、奈津子がやってくる。

その輝きは、どんな宝石にだって打ち勝ってしまふ。

胸に芽生えた想いの存在に、翔太はようやく気付きつつあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2648c/>

黄昏ミルクティー

2010年11月21日03時07分発行